

雪まつり特集・第2部

雪まつりを支える町内の技術者たち



さとの雪まつり

▲雪まつり会場の大雪像「鶴ヶ城」を制作した大正工業株の皆さんと町内の大工・左官職人の皆さん



▲毎日、会場内ハウスで打合せを行い小沼さん(中央)からその日の作業について指示を受けるオペレーターと事務局の皆さん



上/1月17日、盤づくりを終えた会場
下/2月9日、会場が完成した雪まつり前日の様子

「表1」会場制作の大まかな流れ

| 工程・担当 | 作業期間 | 1/10 | 2/1 | 2/9 | 期 間 (約) |
|--------------------------|------|------|-----|-----|---------|
| 会場の盤づくり/町オペレーター | | ←→ | | | 1週間 |
| 雪運搬/町内建設会社など | | ←→ | | | 1週間 |
| 大雪像制作/大正工業㈱ | | ←→ | | | 1ヶ月 |
| 電気・照明の設置/㈱本多電気工事店 | | ←→ | | | 1ヶ月 |
| 入場門制作/電源開発㈱ | | ←→ | | | 10日間 |
| 小間の設置/美馬建設㈱ | | ←→ | | | 1週間 |
| 会場内外雪像制作/町内の小中高校・企業・団体など | | ←→ | | | 1週間 |



▲この他、町オペレーターには雪運搬の場所づくりや来場者用の駐車場づくりなど多くの作業があります

▲多くの来場者を迎えるために、会場内外の整備を進める関係者

たくさんさんの工程を経て
会場がつくられる

只見ふるさととの雪まつりの会場制作は、1月上旬から2月の本番を迎えるまで約1ヵ月間、作業が行われます。この間の作業工程は「表1」とおりで、重機による会場の盤づくりから始まり、大雪像用の雪運搬、大雪像の制作、出店者用の小間の設置、会場内外の雪像制作、電気・照明の設置など多くの作業工程を経、会場がつくられています。

会場をデザインする
会場コーディネーター

1月上旬から始まる会場制作の全ての工程は、会場コーディネーターの小沼信孝さんを中心に、作業が進められています。

今回の雪まつり特集の第2部では、雪まつりを支える技術者や町民の方々に焦点を当て、雪まつり会場制作の裏側を皆さまにご紹介いたします。

雪まつり実行委員会
その年のテーマを決定

雪まつりのテーマは、町内の観光・商工・各種団体や雪まつり関係者でつくる「只見ふるさと」の雪まつり企画実行委員会の中で案を出し、その後の町長などが組織に加わる「只見ふるさと」の雪まつり実行委員会」で検討されます。今年は「戊辰150周年」のテーマと大雪像「鶴ヶ城」が決定しました。

**地元建設会社などが連携
会場の基礎をつくる**

会場制作のスタートは、雪で覆われた会場の盤づくりから始まります。1月11日から1週間かけて、町オペレーターが重機を使って、会場の土台となる雪の盤を踏み固めます。



▲雪運搬が始まった会場



▲ロータリーやバックホーなどの重機を巧みに操り大きな雪山をつくる現場



▲雪像制作が進む会場

盤の完成後、1月18日に会場制作の安全を祈願した「雪運搬式」が行われ、大雪像用の雪が町内各地から集められます。雪運搬は、(有)ジオ・サイクル、川合車輛、浅草建材(株)の地元企業の協力をいただきながら、10tダンプ約千台分の雪が集められます。集めた雪は、

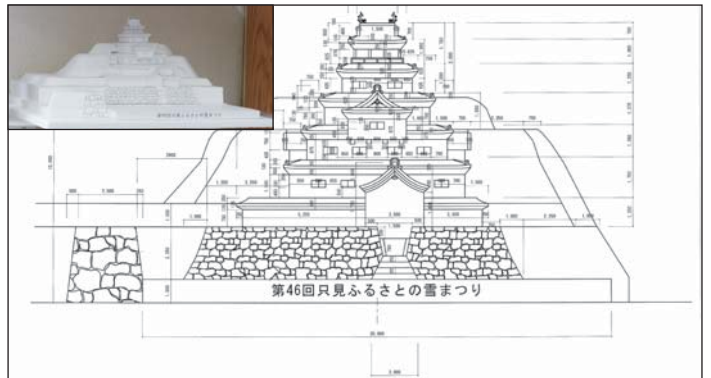
バックホーやブルドーザーで大雪像より大きな雪山をつくりあげ、大雪像制作の準備が整います。また、場内に降り積もった雪や大雪像から余った雪などは、会場内の雪像や入場門、雪壁などに使われ、無駄のない作業工程が組まれています。



▲車内で作業の確認を行うオペレーターの皆さん



▲町内各地から雪を集める現場



**建築物と同じ工程で
大雪像をつくる技術者**

雪まつりの大雪像は、町内企業の大正工業(株)の協力により毎年つくられています。作業は本物の建築物をつくる工程とほぼ同じに進められており、設計図や模型などを

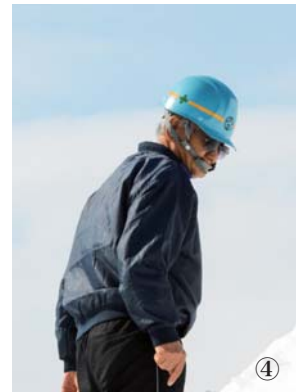


▲大正工業(株)が作製した大雪像「鶴ヶ城」の設計図と縮尺模型

▲測量をしながら設計図どおりに作業を進める大正工業(株)の関係者の皆さん

作製して精巧な大雪像をつくっていきます。最初に大雪像用に集めた雪山に対して測量し、位置出しを行います。位置

出しが終わると、大工や左官といった町内の職人の方々が、設計図を基に雪山の頂上から順に約15日間かけて削り出していきます。この間、吹雪の日も雨の日も休まず大雪像の引き渡し日となる雪まつり前日まで作業は行われます。今年の大雪像も職人の手によって繊細かつ大胆につくりあげられ、高さ約12m・幅約30mの見事な「鶴ヶ城」が完成しました。



①頂上付近の作業現場 ②輪郭を出す増田久さん ③頂上部で作業する馬場信利さん ④オペレーターの佐藤隆之さん ⑤雪を削る五十嵐賢さん ⑥吹雪の中作業を行う酒井正直さん ⑦細かい削りだしを行う星鉄雄さん ⑧スコップで削り出す栗田国男さん ⑨足場の上で作業を行う渡部芳一さん

ゆきんこ市を支える
小間と給排水設備

雪まつりの楽しみの一つといえば、町内出店者による「ゆきんこ市」。郷土料理などが味わえるほか、民芸品や切手・ハガキなどの販売と27店舗が軒を連ねています。なめこ汁などの振る舞いコーナーや救護・警護ブースなどを含めると30以上の小間が必要となります。この小間の基礎となる骨組みを設置しているのが美馬建設(株)の方々です。2月初旬に会場の配置図を基に小間の位置出しを行います。その後、長さ5mの単管パイプ約700本を約3日間という短期間で一気に組み立て、小間の骨組みを完成させます。



▲小間の完成により、多くの人で賑わう「ゆきんこ市」

▲小間の高さや角度を確認しながら作業を進める現場

▲小間用の単管パイプを組む美馬建設(株)の皆さん

骨組みの完成後は、出店者などによりブルーシートや装飾などを施し、小間の完成となります。

また、出店者の中には給排水設備を必要とする店舗もあるため、小間の骨組み作成と同じ時期に、地元の設備会社との共業の方々が給排水設備を小間や会場内に設置し、来

場者に多くのメニューが提供できるように対応しています。

ポランテアで制作 雪まつり会場の入場門

毎年、雪まつり会場の入り口には、大きな入場門が作られます。この入場門を制作しているのが、Jパワーグループの方々です。Jパワーグループ

の方々は、毎年ポランテアで入場門を制作しており、今年で約30年を迎えました。入場門には干支や大雪像に合わせたものがつくられており、今年は大雪像「鶴ヶ城」に合わせた城門がつくられ、城門は2月1日から1週間弱で制作され、今年のテーマに沿った城門が完成しました。



- ⑩給水設備を設置する共業の渡部さん
- ⑪照明の位置を確認する本多さん
- ⑫入場門を引き渡した電源開発の皆さん
- ⑬入場門に照明を設置する本多電気工事店の方々
- ⑭撮影スポットになった入場門

大雪像や会場を彩り

雪まつりを支える電気・照明

雪まつりに欠かすことのできない電気や照明。これらは(有)本多電気工事店の協力により設置されています。1月初旬、会場の盤づくりとほぼ同時期に配電や電線の敷設などが行われます。そして、1月下旬には雪まつりの横断幕を設置し、直前に大雪像や入場門、会場内の雪像といったあらゆる場所に照明を設置して、幻想的な会場をつくりだしていきます。また、ゆきんこ市の小間内にも電



▲おんべを設置する只見区の皆さん



▲かがり火が設置された会場

気・照明を設置し、多くの来場者を出迎えるようになっています。

町全体で 雪まつりを盛り上げる

雪まつり1週間前になると、町内の小中高生や各団体などが会場内外にミニ雪像をつくり、来場者を迎える準備をします。また、町内各所でも区や団体、個人といった多くの町民が道路沿いや家の前に雪像をつくり、町全体をあげて雪まつりを盛り上げています。

更に、会場では雪像以外

雪まつりインタビュー

会場制作で心掛けていることは、作業員の負担を減らし、安全に作業できるようにすることです。そのためにも、来場者と作業員の視点の間に立ち、バランスを考えながら会場制作をしています。例えば、大雪像の図面の原案を考える際も、作業員の人数・時間・安全と、雪像のボリュームなどを考えながら制作しています。今後は、以前のように町内各所に大小さまざまな雪像がつけられ、雪まつりを町全体で盛り上げることが理想と考えます。また、オペレーターの数も減っていくため、人員の確保に努め、雪まつりが末永く続くようにしたいと考えています。



会場コーディネーター
小沼 信孝さん



大正工業(株)現場監督
星 幸夫さん

雪まつりの大雪像制作に第34回目から携わり、今年で13年目を迎えました。大雪像制作においては、正確につくることと高所作業の安全対策に心掛けています。特に実物のものに近づけるために、会場コーディネーターが制作した縮尺図面や実物写真を見ながら縮尺模型まで製作し、測量をしながら職人の方々と打合せを行い忠実に再現しています。今年の鶴ヶ城は、不規則な石垣がアピールポイントでした。苦勞することは、天候により作業が大きく左右されることです。これからは、雪像づくりに携わる職人不足が課題になるので、今後の雪まつりについて町全体で考えていきたいと思っています。

雪まつりの電気・照明関係は、第1回目から携わり今年で46年目を迎えました。心掛けていることは、大雪像のモチーフを活かした図面どおりに照明を配置することと、会場全体の照明の配置を考えながら、来場者が暗くて事故を起こさないよう、明かりを確保するよう気配りをしています。苦勞する部分は、自然が相手なのでその都度臨機応変に対応することです。今後も多くの方々に来てもらえるような雪まつりにするために、若い方に協力をいただきながら盛大に開催できるよう、みんなで頑張っていきたいと思っています。



(有)本多電気工事店
代表取締役
本多 勉さん



(株)JPハイテック
吉津 唯利さん

雪まつりの入場門の制作は、平成元年に只見ダムが竣工したのをきっかけに携わるようになりました。現在では、電源開発(株)田子倉電力所、(株)JPハイテック、(株)水力機電工事、(株)南会建機がJ-POWERグループとして1日約10名程度が集まり1週間弱で制作しています。入場門は社内の実行委員会で決定したものをつくっており、始めた当初はその年の干支をつくっていましたが、近年では大雪像にあわせた入場門をつくっています。今後も雪まつりが続く限り協力していきたいと思うので、しっかりと会社の後輩に引き継いでいきたいです。

にも只見区の方々によるおんべや酒井建設(資)製材所の方々によるかがり火などが設置され、雪まつりイベントを支えています。

雪まつりを支える

只見町民の方々

このように、只見ふるさとの雪まつりは、様々な工程を経て感動的な会場がつけられ、そして多くの方々の協力により開催されています。

この他にも紹介することができなかつた、多くの方々の支えもある一方で、雪まつりには後継者不足という大きな課題があります。この課題克服のためにも、これからの雪まつりについて町全体で考えていかなくてはならない時期に来ていると感じます。

これからも只見町の雪まつりが将来にわたって続いていくことを期待します。